4/17 朝日

妹に薬飲ませ… 失った記憶

無職　（京都府　82）

敗戦翌年、1946年の春、旧満州（中国東北部）四平で、中国共産党軍と国民党軍は内戦中だった。父は徴兵されて音信不通。砲火の中、母子5人で暮らした。

7月、日本引き揚げが決まり、家に日本人会の男性数人が来た。1歳の一番下の妹について、「長い旅に耐えられないから殺しなさい」と言い、液体の毒薬を渡された。母が抱き、小学6年の長男の僕がスプーンでのませると妹は死んだ。その後の幾つもの記憶を僕は失った。

後年再会した小学校同窓生によると、その日僕は泣きながら毒をのませた様子を話したらしい。

心身共に不調だった母が荷車に横たわっていたのは覚えている。弟2人と共に貨物列車に乗せた。引き揚げ船出発地、現在の遼寧省の葫蘆島に到着。病院で、母は畳の上に寝かされた。処方された薬を母はのんでいたがある日、僕は別の粉薬を医師から渡された。

僕がのませると、母は泡を吹いて死んでしまった。ぼうぜんとした僕。通夜で弟2人と僕は黙りこんだ。8月、3人で父母のふる里、京都へ。祖母の懐に飛び込んだが、上の弟はすぐに病死。

今、75歳の下の弟と私。安保法制や、昔の治安維持法を想起させる「共謀罪」法案に反対だ。「誰の子どもも殺させない。いつまでも平和を」と声を上げ続けている。

衰弱した同級生 押さえ注射

無職　（宮城県　93）

「フィリピンにて戦死。葬儀に参列を」。終戦の翌年、看護師養成学校時代の同級生の訃報が日本赤十字社から届いた。ともに学んだ仲間。同級生の消息を求めていた私は葬儀に駆けつけた。

彼女と戦地で一緒だった同級生5人に会えた。話は壮絶だった。米軍におびえつつ患者を連れ、ジャングルを逃避行。蛇、トカゲ、木の実と何でも食べた。栄養失調や赤痢で行軍に遅れる者は、クレゾールを注射、命を奪った。

彼女もマラリアで衰弱。「歩ける。注射しないで」と懇願されたが、ついに軍医が「俺が注射する」。「やらねばならぬのなら自分たちで」と覚悟を決めた。「少し休もう」と学生時代のように6人並んで横になり、安心した彼女が眠ると、1人が馬乗り、4人が手足を押さえ、注射したという。

「私たちが殺しました」。5人は両親にわびた。泣き伏していたお父さんは顔を上げ「ありがとう。娘は皆さんのおかげで日本に帰れました」と頭を下げた。「歩けぬ娘はそのまま残されたら、命の限り友を、親を呼び続けたでしょう。それは耐えられません」

5人が大切に持ち帰った彼女の従軍手帳にはカツ丼、親子丼と食べ物名がずらり。最後は「母さんのけんちん汁うどん」だった。